

RETAILER ACADEMY NEWS

Jan 2021 | Bentley Motors Japan



2020年の全世界の 販売台数は過去最高を記録 日本の販売実績は463台



ベントレー モーターズはこのほど、2020年の販売台数が前年比2%増の11,206台だったと発表しました。7週間の生産停止や世界各地におけるロックダウンなど、新型コロナウイルスの感染拡大により大きな影響を受けた困難な1年だったにもかかわらず、ベントレーの101年の歴史において過去最高の販売台数を記録しました。

この好調を支えたのは、新モデルの導入と人気モデルの世界的な販売増です。特に新型フライングスパーが世界各国で発売され、お客様と現地メディアの双方から多くの支持を得ることができました。フライングスパーについては10月にV8モデルも発表され、さらに需要が高まりました。

モデル別ではコンチネンタルGTとコンチネンタルGTコンバーチブルが総販売台数の39%を占め、年間販売台数1位のシリーズとなりました。ベントイガは先代モデルの生産終了や、新型コロナウイルスの感染拡大によって新モデルの導入が遅れましたが、単一モデルとしては最大の販売台数を記録し、総販売台数の37%を占めました。

地域別ではアメリカが4%増の3,035台でトップ。新型フライングスパーの導入とコンチネンタルGTとコンバーチブルの販売が好調だったことが奏功しました。2位の中国は48%増の2,880台でアメリカに肉薄。こちらも新型フライングスパーがトラディショナルなセダン市場で受け入れられたことと、ベントイガが継続して販売を伸ばしたことが好調の要因となりました。一方、ヨーロッパは新型ベントイガの市場導入の遅れが響いて18%減の2,193台にとどまりました。ベ



ントレーのホームである英国でも22%減の1,160台だったほか、中東でも14%減の735台となりました。

前年実績を下回るも日本は463台

日本自動車輸入組合（JAIA）の輸入車統計情報（2020年12月度月報：速報）によると、2020年1～12月のベントレーの日本での販売台数（新規登録台数）は、前年比12%減の463台でした。このうちコンチネンタルGT（クーペおよびコンバーチブル）が218台と市場をけん引。ベントイガは129台、フライングスパーが94台、6月に生産を終了したミルザンヌは16台でした。過去最高の販売台数を記録した2019年の実績は下回ってしまいましたが、イレギュラーが多く厳しい状況であったにもかかわらず、2020年は過去3番目の販売台数を達成しました。これだけの台数を販売できたことについて、リテーラーの皆様のご協力に対しあらためて感謝いたします。2021年は販売台数をさらに伸ばせるよう、ベントレー モーターズ ジャパンとしても最大限のサポートを行ってまいります。





PHEVに加えBEVも加速 競合ブランドの 電動SUV事情

ベントレー初のハイブリッドモデルとなるベンティガ ハイブリッドは、ハイエンドSUVマーケットにおける電動化を加速させる存在となります。

そこで今回は、競合ブランドが販売している電動SUVモデルと、今後導入が予想されるニューモデルについてご紹介します。



電気自動車のEQCと、プラグインハイブリッドのGLC 350 e 4MATICおよびGLC 350 e 4MATIC クーペを導入

電動化モデルはミドルクラスのSUVのみで、ハイエンドSUVのGLEおよびGLSには現時点で電動化モデルの設定なし

本国ではディーゼル・プラグインハイブリッドのGLE 350 de 4MATICが用意される

EQC400 4MATIC：10,800,000円

GLC 350 e 4MATIC： 8,990,000円
GLC 350 e 4MATIC クーペ：9,320,000円



- GLCをベースにした同社初の電気自動車。最高出力408ps、最大トルク765Nmを発揮
- リチウムイオンバッテリーの容量は80kWh。WLTCモードで400kmの航続距離を実現。急速充電と普通充電に対応
- 車両の充電状況と充電ステーションの位置情報などの情報を判断して適切なルート案内を行う「EQ オンラインナビゲーション」を装備
- 提携充電ネットワークが利用できる「Mercedes me Charge」が1年間無料。普通充電器本体の無償提供+設置費用の10万円サポートを実施

- 2.0L 4気筒ガソリンエンジン+モーターの組み合わせで、システム出力は320ps、700Nmを発揮
- 13.5kWhのリチウムイオンバッテリーを搭載。電気モーターのみで130km/hまでの走行が可能。フル充電の状態で最大46.8km (GLC 350 e 4MATIC クーペは45.2km)の走行が可能
- 普通充電器 (AC) が定額で利用できる「Mercedes me Charge AC」を導入。普通充電器本体の無償提供+設置費用の10万円サポートを実施



電動化を積極的に推し進めるアウディは、同社初の電気自動車として、e-tronとe-tron Sportbackを日本に導入

本国では上級モデルを中心にプラグインハイブリッドモデルの設定を拡大しているものの、日本導入は未定

本国に設定されるQ7およびQ8のプラグインハイブリッドモデルは、ベンティガ ハイブリッドと競合する存在

e-tron Sportback 50 quattro/55 quattro
1st edition：11,430,000円/13,270,000円

e-tron 50 quattro：
9,330,000円～11,080,000円



- クーペスタイルのミッドサイズSUVモデルとして、2020年9月に55 quattro 1st editionを発売。2021年1月に50 quattroを追加
- 55 quattro 1st editionは、システム出力300kW/664Nmの高出力モーターと95kWhの大容量バッテリーを搭載するパフォーマンスモデル。満充電での走行距離は400km (WLTCモード)
- 50 quattroは、システム出力230kW/540Nm、バッテリー容量は71kWhで、満充電での走行距離は318km (WLTCモード)

- 先に登場したクーペスタイルのe-tron Sportbackに対して、SUVボディタイプとして登場。荷室容量はe-tron Sportbackの616Lに対して660Lを確保
- システム出力は230kW/540Nm、バッテリー容量は71kWhで、満充電での走行距離は316km (WLTCモード)。小型のバッテリーにより、軽量化と低価格化を実現



プラグインハイブリッドのSUVとして、ミドルサイズにはX3 xDrive30e、アッパーサイズにはX5 xDrive45eを設定

X3をベースにした電気自動車のiXと、新開発の電気自動車となるiXを2021年以降に導入予定

BMW i充電器および設置基本工事費無料キャンペーンを実施。総額328,900円 (税込) をサポート

X3 xDrive30e：
7,780,000円～8,360,000円

X5 xDrive45e/X5 xDrive45e M Sport：
10,280,000円/11,180,000円



- 2.0L 4気筒ガソリンエンジン+モーターの組み合わせで、システム出力は292psを発揮
- 12kWhのリチウムイオンバッテリーを搭載。電気モーターのみで140km/hまでの走行が可能。フル充電の状態で最大44kmの走行が可能

- 3.0L 6気筒ガソリンエンジン+モーターの組み合わせで、システム出力は394psを発揮
- 24kWhのリチウムイオンバッテリーを搭載。電気モーターのみで140km/hまでの走行が可能。フル充電の状態で最大79.2kmの走行が可能

iX 価格未定 (2021年秋発売予定)



- 100kWh以上の高電圧バッテリーを搭載し、最大で600km以上の走行が可能
- 2020年12月16日よりBMW オンライン・ストアにて予約注文の受付を開始 (予約申込金15万円が必要)



カイエンとカイエンクーペにそれぞれ2種類のプラグインハイブリッドモデルを設定

本国仕様では、高電圧バッテリーの容量が14.1kWhから17.9kWhにアップ。日本仕様への展開時期は未定

フル電動スポーツカーのタイコンの発売に合わせて独自の充電ネットワークを準備しているが、現時点では実用的な設置数に達していない

カイエンEハイブリッド/カイエンEハイブリッド
クーペ：12,750,000円/13,430,000円

カイエンターボSEハイブリッド/SEハイブリッド
クーペ：24,080,000円/24,650,000円



- 3.0L V6エンジン+モーターの組み合わせで、システム出力462ps、最大トルク700Nmを発揮
- 14.1kWhのリチウムイオンバッテリーを搭載。電気モーターのみで最高速度135km/h、最大44kmの走行が可能

- 4.0L V8エンジン+モーターの組み合わせで、システム出力680ps、最大トルク900Nmの圧倒的な高出力を発揮
- 0-100km/h加速3.8秒、最高速度295km/hの動力性能は、SUVとしてはトップクラス。電気モーターのみで最大40kmの走行が可能

COMPETITOR INFORMATION



レンジローバーとレンジローバー スポーツにプラグインハイブリッドを設定。レンジローバーはロングホイールベースモデルも選択可能

2.0L 4気筒ガソリンエンジン+モーターの組み合わせで、システム出力404ps、最大トルク640Nmを発揮

0-100km/h加速は6.7秒(レンジローバー) /6.3秒(レンジローバー スポーツ)。最高速度は220km/h

13kWhの大容量バッテリーを搭載。電気モーターのみで最大40.7km(レンジローバー) /43.8km(レンジローバー スポーツ)の走行が可能



レンジローバー：
15,500,000円～29,560,000円
レンジローバー スポーツ：
12,180,000円～13,560,000円



ミドルサイズフル電動SUVとなるI-PACEをラインアップ

前後アクスルに電気モーターを搭載。最高出力400ps、最大トルク696Nmを発揮。0-100km/h加速は4.8秒

リチウムイオンバッテリーの容量は90kWh。WLTCモードで438kmの航続距離を実現。急速充電と普通充電に対応

NCS(日本充電サービス)の2万カ所以上の充電ステーションを利用できる「ジャガー チャージングカード」の申し込みが可能



I-PACE：9,760,000円～11,830,000円



各モデルのパワートレインをプラグインハイブリッドと48Vハイブリッドに統一。ボルボの国内販売モデルは全車電動化が完了

2020年8月にSUVモデルのXC40/XC60/XC90のパワートレインを刷新。全車にプラグインハイブリッドと48Vハイブリッドを設定

フラッグシップSUVのXC90には、2.0L 4気筒直噴ターボエンジンをベースにした48Vハイブリッドモデルを3種類、プラグインハイブリッドを1種類設定。プラグインハイブリッドモデルは、11.6kWhのリチウムイオンバッテリーを搭載。電気モーターのみで最大40.6kmの走行が可能

欧州では電気自動車のXC40 Rechargeを発売。最高出力408psで、航続距離は400km以上。日本では2021年中の受注開始を予定



XC40：4,090,000円～6,490,000円
XC60：6,390,000円～9,490,000円
XC90：8,340,000円～11,390,000円



他のSUVにはないユニークな設計と電動SUVをリードする圧倒的な高性能を兼ね備えたモデルXをラインアップ

デュアルモーターAWDの電動パワートレインは、0-100km/h加速4.6秒、最大航続距離561kmの「ロングレンジ プラス」と、0-100km/h加速2.8秒、最大航続距離548kmの「パフォーマンス」から選択可能

ソフトウェアアップデートにより、将来の完全自動運転に対応したハードウェア

乗車人数を5人/6人/7人から選べるレイアウトと、最大2,487Lの広大な荷室スペースを確保したスペースユーティリティの高さ

欧州の自動車安全テスト「ユーロNCAP」において、全カテゴリーで最高評価の5つ星を獲得した高い安全性



モデルX：10,599,000円(ロングレンジ プラス)
12,999,000円(パフォーマンス)

COMPANY

クルーの敷地がついに1つに統合 次の100年に向けた基礎を確立



ントレー モーターズはこのほど、英国クルー本社の敷地が1つに統合した「キャンパス」になったことを発表しました。これまではピムズレーンとサニー パンクロードによってベントレー本社の敷地は2つに分断されていましたが、チェシャー イースト カウンシルとの長年に渡る計画立案、協議、積極的なサポートにより、この2つの道路では一般車両の通行を止め、ベントレーが優先的に使用できるようになりました。これにより、ベントレーは長期的な展望のもとで開発と拡張が可能となり、より安全で効率的かつ最新の製造施設を作ることができるようになります。ピムズレーンは、ベントレーが1938年にクルーに生産拠点を置いて以来、ベントレー本社の中心

であり続けてきました。ここにはエンジニアリング テストセンターとリサーチ&デベロップメントビルディングを建設し、電動化への取り組みを加速化させていくことになります。

ピムズレーンとサニー パンクロードがベントレー優先道となった初日には、パレード走行を実施。エイドリアン・ホールマーク会長兼CEOがステアリングを握った1929年の4 1/2リッター「ブロー」のコンティニュエーションシリーズ0号車を先頭に、ベントレーの現行モデルが連なってピムズレーンを走行しました。

ベントレーのピーター・ボッシュ取締役(マニュファクチャリング担当)は、「ベントレーは101年の歴史を持つラグジュアリー カー

メーカーを、持続可能で倫理的な新しいロールモデルに変えるという、重要かつ迅速な再定義を敢行する時期にあります。この目標は、ワールドクラスの施設を通じてのみ達成できます。「キャンパス」の創設は、私たちのあらゆる側面を進化させてくれます」などとコメントしています。





ベンテイガ ハイブリッド発表 静粛性が際立つラグジュアリー SUV

ベントレー モーターズはこのほど、プラグインハイブリッドモデルのベンテイガ ハイブリッドを発表しました。サスティナブルなラグジュアリー カーメーカーを目指す Beyond 100 戦略発表後の第一弾となるモデルで、世界で唯一となる電気動力を備えた真のラグジュアリー SUV です。今回は、ベンテイガ ハイブリッドの概要についてまとめました。

ベンテイガ ハイブリッドの主な特徴

- EV 走行時の比類のない洗練された静粛性
- 電気モーターと3.0リッター V6 ガソリンエンジンを搭載
- エンジンとモーターを組み合わせた最高出力449PS、最大トルク700Nm
- 総走行可能距離は536マイル（約858km）、モーターのみで31マイル（約50km）

エクステリア・インテリア

- ボディサイド下部にクロームの「Hybrid」バッジ
- ステッププレートに「Hybrid」の刻印

ベンテイガ ハイブリッドのエクステリアとインテリアは、基本的にはベンテイガ V8 を踏襲したものとなっています。ガソリンエンジンモデルとの違いは、ボディサイド下部に装着されたクロームの「Hybrid」バッジと、ステッププレートの「Hybrid」の刻印となります。



パワートレイン

- 電気モーター×3.0リッター V6 エンジン
- モーター単体での最高出力128PS、最大トルク350Nm
- エンジン単体での最高出力340PS、最大トルク450Nm
- 最高速度254km/h、0-100kmh 加速5.5 秒
- 168セルのリチウムイオンバッテリーは、2.5時間で満充電可（地域によって異なる）
- ボタン操作だけでEVドライブモード、ハイブリッドモード、ホールドモードを選択可

ベンテイガ ハイブリッドは、基本的にはモーターによるEV 走行がメインとなり、V6 エンジンはさらにトルクが必要になる状況か、約134km/h を超える速度が要求される状況でモーターをサポートする存在となります。そのため、ベンテイガ ハイブリッドは極めて静粛性が高く、ほぼ無音となる低速時には、車両の接近を歩行者に知らせるため、専用スピーカーで音を発します。

ハイブリッド専用の機能

- EVドライブモード、ハイブリッドモード、ホールドモードの3種類を装備
- 純粋な電力とハイブリッド電力をドライバーに知らせるベントレー ハイブリッド エフィジェンシー アクセルペダルを装備
- ナビゲーションとの連動で車両の効率を最大化

EVドライブモードは市街地での運転などの短距離走行に最適です。ベントレー ハイブリッド エフィジェンシー アクセルペダルに装備されたプレッシャーポイントが、純粋な電力とハイブリッド電力の境界をドライバーにフィードバックするなど、できるだけ長くEV 走行ができるように効率性を最大化します。ハイブリッドモードは、インテリジェント ナビゲーション システムからのデータを使用し、効率性と航続距離を最大化するモードです。ホールドモードは、エンジンとモーターのバランスをとり、高電圧バッテリーの充電状態を保持。走行モードをSportにした場合には、ホールドモードがデフォルトとなります。



AWARDS

ベンティガ V8が4×4マガジンの SUVオブ・ザ・イヤーを受賞



新型ベンティガ V8がこのほど、『4×4マガジン』誌のSUVオブ・ザ・イヤーを受賞しました。ベンティガは以前、同誌でパフォーマンスSUVオブ・ザ・イヤーも受賞しており、唯一無二のラグジュアリーSUVというポジションが認められたことになります。

4×4マガジンの編集者：アラン・キッド氏のコメント

「我々はこれまで、ベンティガをパフォーマンスSUVであると認識してきました。このモデルのダイナミクスやキャラクターが際立っていたため、ベントレーの重要な要素であるラグジュアリーさを見落としてしまっていたことは否めません。新型ベンティガは、路上での軽快なタッチや運転する楽しさといった素晴らしい部分を残しつつも、シートやフェイスパネル、電子機器が新しいアイテムに置き換えられたインテリアにより、このモデルのキャラクターとの完全な一致が見られました。一新されたデザインも、このモデルの運動能力にマッチしたものになったと考えています。ベンティガは競合モデルも含めて最上級カテゴリーにあるSUVですが、かつてのパフォーマンスSUVオブ・ザ・イヤー受賞車が、現在のラグジュアリー SUVオブ・ザ・イヤーとなったように、1つのモデルが2つの別カテゴリーでこのような高みに達したことは、本当に注目に値します」。

COLLECTION

フライングスパーがモチーフの アイテムをラインアップ



ベントレーの公式グッズ「ベントレー コレクション」に、フライングスパー関連の新アイテムが続々とラインアップされています。

1：43スケールのモデルカーには2種類のフライングスパーを追加。1つはシルバーフロストのボディにブラックラインスペックを合わせた仕様で、21インチ5トリプルスポークホイールを含むエクステリアと、ベルーガ×ポーボイズのインテリアといった、実車を忠実に再現したモデルカーです。もう1つは、ボディカラーがライトサファイア、インテリアはインペリアルブルー×ポートランドというラグジュアリーな仕様となっています。

このほかにも、フライングスパーに採用された、新しいフライングBマスコットをモチーフとしたアイテムも充実しています。クロームのペーパーウェイトやレターオープナーはデスク上をラグジュアリーかつスタイリッシュに飾ります。ボトルストッパーは、最高級ワインやお祝い用のシャンパンボトルに合うように設計されたアクセサリです。レーザーのボトルホルダーやレザートレイと組み合わせることで、テーブルをスタイリッシュに演出できます。

いずれのアイテムもベントレーのブランドギフトボックスに入っているため、プレゼントにも最適です。新型フライングスパーに興味のありそうなお客様を中心に、積極的にお勧めください。

PEOPLE

デザイン部門の責任者に アンドレアス・ミント氏



ベントレー モーターズはこのほど、デザイン部門の責任者にアンドレアス・ミント氏が就任すると発表しました。着任は2021年3月1日の予定です。ミント氏は25年以上にわたるカーデザインの経験を持ち、キャリアのすべてをフォルクスワーゲン グループで過ごしてきました。直近の6年間ではアウディのエクステリアデザイン責任者として、エクステリアデザインにおける改革を指揮。さらに、プレミアムSUVクーペのQ8の開発や、アウディ初の完全EVであるe-tronの開発にも携わってきました。

ベントレー モーターズのマティアス・ラブ取締役（エンジニアリング担当）は、「ミント氏をベントレーに迎えることができるのを嬉しく思います。ベントレーにとって非常に重要でありエキサイティングでもあるこのタイミングで、ミント氏と共に仕事ができることを楽しみにしています。2030年までに完全に電動化するための取り組みを加速させる今、革新的なEVの設計やデリバリーにおけるミント氏のクリエイティブな経験は、ベントレーがサステナブルなラグジュアリーモビリティの分野で世界をリードするという目的を達成する助けになるはずです」などとコメントしています。

なお、これまで6年間にわたってベントレーのデザイン部門の責任者を務めてきたステファン・シーラフ氏は退任し、フォルクスワーゲン グループを離れることになります。

AWARDS

最も影響力のある自動車業界の女性に ベントレーから3人が選出



ベントレー モーターズはこのほど、2020年の最も影響力のある自動車業界の女性として、ベントレーの3人の従業員が選出されたと発表しました。選出されたのは、デジタルおよびテクノロジー部門のリリー・ハルゼ氏、マニファクチュアリング システム マネージャーのマリアム・ザヘディ氏、ダイバーシティ責任者のアン・カトリン・アルテンドルフ氏で、いずれも影響力のある女性のロールモデルとして選出されました。

ハルゼ氏は、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、従業員の安全な移動とソーシャルディスタンスを確保するのに役立つアプリとソフトウェアを開発するチームの一員として、重要な役割を果たしました。ザヘディ氏は、マニファクチュアリング システム部門のテクニカルマネージャーとしてBeyond 100戦略で重要な役割を果たしていることに加え、より多くの女性に製造業でのキャリアを検討するように促す活動をサポートしていることなどが評価されました。ベントレー初のダイバーシティ責任者であるアルテンドルフ氏は、Beyond 100戦略における多様性戦略を設計し、さまざまなバックグラウンドを持つ従業員をサポートするネットワーク開発に尽力してきました。アルテンドルフ氏は現在、ボルシェに異動して新たな役割で活躍しています。

電動化にまつわる用語を再確認

世界各国で続々と導入される厳しい燃費規制などに対応するため、今、世界中の自動車メーカーが熱心にクルマの電動化に取り組んでいます。電動車はモーターや電池など、エンジン車とは違った技術が使われるため、その性能などを理解するには、専門の用語を理解する必要があります。今回は電動化にまつわる用語を解説します。



電動車（xEV）とは何か？

昨年の暮れに「2030年にエンジン車を禁止」という報道が話題を集めました。これは正確に言えば、「2030年代には電動車をメインとして、エンジンだけのクルマを禁止する」という話。しかも決定ではなく、検討されているだけです。また、電動車とは「xEV」とも表示しますが、電気自動車（EV）だけでなく、ハイブリッドカーや燃焼電池車（FCV）も含まれています。逆に言えば、ハイブリッドカーがある限り、エンジンの生産は継続されます。



エンジンにモーター駆動を加えたハイブリッドも電動車（xEV）となります。

AC（交流）とDC（直流）の違い

電気には、流れ方の異なるAC（交流）とDC（直流）の2つが存在します。家庭用の電源はAC（交流）で、乾電池などはDC（直流）です。電気自動車（EV）やプラグイン・ハイブリッドカー（PHV）を家庭でコンセントから200Vで充電するときはAC（交流）で行い、外で急速充電するときはDC（直流）の電気を使います。そのため、多くの場合、電源とクルマをつなぐプラグは、AC（交流）用とDC（直流）用で別の形状をしています。



左のAC（交流）用と、右のDC（直流）の充電口を備えたクルマ。

電気の量を示す Wh（ワット・アワー）

電気の量を示す値が「Wh（ワット・アワー）」です。「W」は仕事率とも呼ばれ、意味合いとしては「HP」や「ps」の馬力と同様です。1W＝0.00136psであり、1kWが1.36psに相当します。その1Wの仕事量を1時間継続する仕事の量が、「Wh（ワット・アワー）」になります。電氣的に言えば、1Wの仕事量を1時間できるだけの電力量となります。電動車の電池がどれだけの電力を蓄えられるかを示すとき、多くの場合、このWhが使われます。

$$1\text{kW} = 1.36\text{ps}$$

$$1000\text{Wh} = 1\text{kWh}$$

電動車の性能を知るための用語

電気だけで走れる距離

||
等価EVレンジ

電気自動車（EV）が1回のフル充電で走れる走行距離は「一充電走行距離」として「km」で表示されます。同じようにプラグインハイブリッド（PHV）が、外部から充電した電力だけで電気走行できる距離を「等価EVレンジ（EV走行換算距離）」と呼び「km」で表示されます。これにはPHVがエンジンを始動させて走る距離は含まれません。

燃料走行に切り替わるまでの距離

||
プラグインレンジ

プラグインハイブリッド（PHV）で、満充電から完全にエンジンによる燃料走行に切り替わるまでの距離を「プラグインレンジ」や「CDレンジ」と呼びます。充電した電気が尽きるまで燃料を使わないクルマは「等価EVレンジ」と「プラグインレンジ」が同じになります。「プラグインレンジ」の距離が長い場合、途中でエンジンが始動することを意味します。

電動走行での効率の良さ

||
電力消費率

エンジン車に燃費性能があるように電動車にも効率を見る数字があります。それが「交流電力量消費率（Wh/km）」と「交流電力消費率（km/Wh）」です。「交流電力量消費率（Wh/km）」が1km走行するのに必要な電力量を示しており、「交流電力消費率（km/Wh）」が充電した1Wh当たりの電気で走行可能な距離を示します。